

### 第3回県立大学の設置の是非を検討するための有識者会議 議事概要

1 日 時：令和3年12月20日（月）10：00～12：00

2 場 所：三重県庁講堂棟 131・132 会議室及びオンライン

3 出席委員

宇野 健司 株式会社大和総研 リサーチ本部 副部長

倉部 史記 NPO 法人 NEWVERY 理事、追手門学院大学 客員教授

中村 佳子 株式会社丸中商店 代表取締役社長

西村 訓弘 三重大学 地域イノベーション学研究所 教授

長谷川 敦子 三重県立津西高等学校 校長

吉田 文 早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

4 内容

(1) 意見交換

○県立大学の必要性について

- ・ 県立大学の目的は、①県内高校生の学びの選択肢の拡大 ②大学による地域の活性化 ③若者の県内定着と地域の人口減少抑制である。必要性という点では、①だけでは不十分で、②と③が重要になる。理想は、魅力的なカリキュラムと地域との接点の提供による地域の活性化であるが、現実的な問題として優秀な実務者を教員として確保できるのかという課題がある。
- ・ これまでの議論から、県立大学には一定の必要性はあると思われる。初めから県外の大学進学を前提としなくてはならなかった地元の生徒に対して進学機会を拡大するだけでなく、県立大学の設置によって他の私立大学や高校に良い影響を与え、県全体の高等教育を良くしていくことができるのではないかと。また、県庁と連携して地域の産業と繋げ、地域の活性化を図るなど、県立大学でなければ果たせない役割があるのではないかと。
- ・ 県立大学に入学してもらうには、県内高校生の現在の進路行動を変える必要があるが、現状の進路行動が明確になっていないため、一体どういう高校生に入学してほしいのか、その高校生にどのようにアピールしていくのかが分からない。また、地域の活性化や地域の若者の就職機会の拡大は、単に大学をつくただけでできるものではない。大学生を就職先として受け入れてくれる企業がどれだけあるのかを調査する必要がある。
- ・ 明確な目標がある生徒は良いが、漠然と大学に行けたら良いと考えている生徒も多く、進学時になって初めて県内に行くことができる大学がないと知ることになる。県立大学として明確なカリキュラムを提示して、この大学に行けばこういった教育を受けられると知れば、多くの生徒がもっと具体的に進学について考えることになるのではないかと。
- ・ 絶対に県立大学をつくらなければならないというわけではないが、県立大学があれば、県内の高校生や保護者にとってより良いだろう。しかし、莫大な県費

を使う県立大学の設置以外にも、県外に出でいかざるを得ない学生を対象とした奨学金をつくるなど、さまざまな手段が考えられる。一方、県立大学だからこそできることがあるのではないかとすることは考える必要がある。

- ・今の大学は本当に学生を成長させているのか、今までの教育の方法で将来を生き抜く力をつけさせられているのかという問題意識を持っている。これまでリカレント教育として、地元企業の社長に博士号を取得させてきた。今の高校生に対してもそのような教育をすれば、もっと成長すると思う。これまでにない新しい考え方の大学を三重県が先導してつくっていくのであれば、県立大学の必要性はあると考える。

### ○県立大学の有効性について

- ・有効性を高めるために気をつけるべきことは、3つある。①カリキュラム編成と教員採用は、アカデミックな教員ではなく、第三者委員会に決定権を持たせること②大学職員としての行動力を発揮させるため、少なくとも幹部職員は県からの出向ではなくプロパー職員とすること③理念倒れにならないよう教員採用を視野に入れて検討を進めること。大学の人材育成の方向性として、良き社会人となる「ジェネリック・スキル」の修得を中心に据えるべきと考える。
- ・学びの選択肢拡大や人材流出の抑制という目的は、大学をつくれれば自動的に達成できるものではない。大学が三重県にとって良い影響を与えるかどうか、他の手段でそれを満たせないのか検討する必要がある。現時点では有効性のあなしは判断できない。これまでの議論で、有効性を高める手段についてはさまざまなご意見があった。最低限満たすべき有効性と、有効性を高めるための取組について、分けて議論すべきである。
- ・県立大学の設置には莫大なコストが必要になるが、効果をどのように考えるのか。大学のミッションとされている教育・研究・社会貢献を、長期にわたって果たすことができるのか、よく検討する必要がある。大学は研究機能も必要であることから、一定レベルの研究機能を果たせる教員も必要になる。社会貢献についても、どこと連携するのか、どこまで可能であるのか検討する必要がある。大学をつくれれば有効であるということにはならない。
- ・三重県では、理工系の学生は県外へ出て行って戻って来ない傾向にある。県内にも理工系の学生が活躍できる企業は多くあるが、地元の人自身がそれを知らない実情があり、歯がゆく感じている。オンラインを有効活用して地元の大学で学ぶことの良さもある。また、教育内容だけでなく、学校運営も大切な視点である。学費を運用したり、寄附金を集めたりしている大学もあるが、そういった方法も検討していく必要がある。
- ・県内の高校生は、工学部や経営学部への進学とともに、資格取得を希望しているが、そのような大学は多くある。一方、大学設置の目的が新しい大学をつく

- ることにあるのであれば、全国から生徒が来る大学になる。新しい大学といっても、学科や教育内容、学習活動等のどこで新しさを出していくのか、検討が必要である。県外での経験は、学生を人間的に成長させる。県内にとどまるだけでなく、県外へ出ていくこと、県外から来てもらうことも大切だと考える。
- ・この大学は何にこだわって人材を育成するのか定義づける必要があり、その認識で議論を進めるべきである。

### (3) 県立大学のあるべき姿について

- ・大学の基本コンセプトは、「元気な大学生が地域の人と接点を持ち、活気ある三重県にする」こととし、そのために「元気な若者が全国から集まる大学」、「地元と接点を持つ大学」、「新しいチャレンジを永遠に継続する大学」を理念としてはどうか。SDGsは今後も重要となる考え方であるので、SDGs学部などにすれば、良い学生が集まるのではないか。また、何を勉強するのかではなく、どうやって教えるのかといった手法で差別化を図ることもできるのではないか。
- ・全国には特色ある大学がいくつかあるが、学ぶジャンルに特色を出すのではなく、地域貢献に突出することを特色とする大学があっても良い。既存の工学部や経済学部であっても国際色を出した学部も多い。地域も同じであり、たとえば工学部であっても、地域色を打ち出した工学部があっても良い。地域枠については、地域に与えるインパクトを考慮すべきであり、今後の論点になる。
- ・今後は、かなり特色のある大学でなければ生き残れない。特色ある大学には2種類ある。1つは全国から学生を集めることができる専門分野に特化した大学であり、もう1つは地域密着型の大学である。後者を検討する場合、地域を活性化する人材をどのように生み出すのか、地域の産業とどのように連携していくのか検討する必要がある。また、県の北部は製造業、南部は一次産業が多く、多様な産業があることから、県のどの産業により重点を置いて連携するのか考えておく必要がある。
- ・今は教育だけではなく、人としての育成も大学に期待されている。どのような力をつけさせれば生きていくことができるのか、地域のリーダーをどのように育てるのか、突き詰めて検討していく必要がある。
- ・地域社会を担っていく高い志をもった人材を育成すべきである。教育内容を一分野に絞るのか、学部学科にとらわれずコンセプトを持ったカリキュラムとするのかについては、検討する必要がある。県外から来た学生にも三重県のことを知ってもらい、県内外出身に関わらず、全ての学生にとって、最高の場としなくてはならない。
- ・学生にいかに「考える力」をつけさせるかが重要であり、そのためには今までの大学のあり方と発想、教え方も含めて大胆に変える必要がある。そのために

は、県立大学の学生とそれ以外の大学の学生など、三重県にいながらさまざまな学生が混ざり合う場となることが望ましい。世の中は変わっていくが、その中で変わらず大切なのは「考える力」であり、それを修得させる方法を、教育の仕方に反映させていくことが重要である。